

野口米次郎

定本詩集

第三  
表象抒情詩

第一書房

80

75

70

65



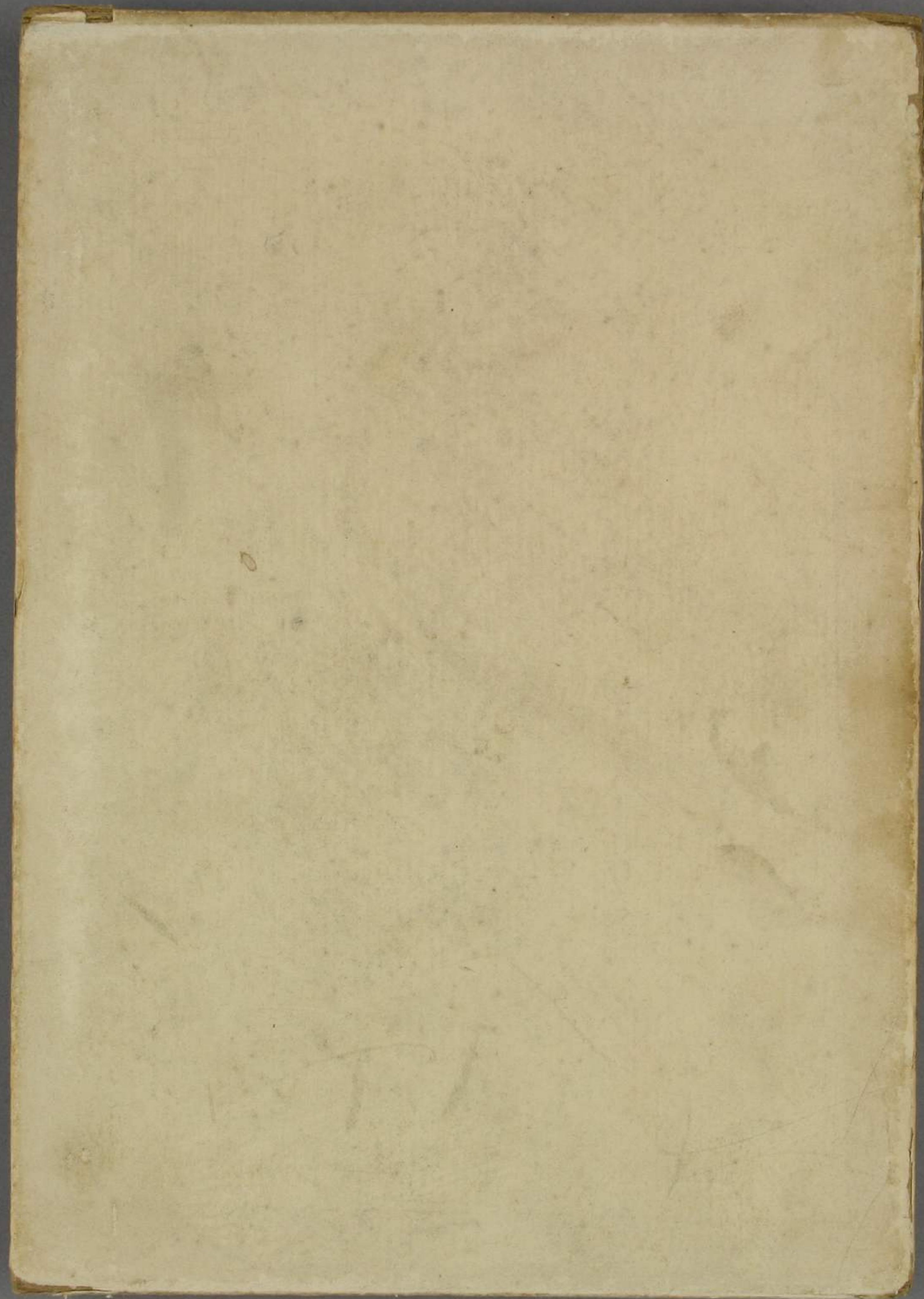
野口米次郎  
定本詩集

第三

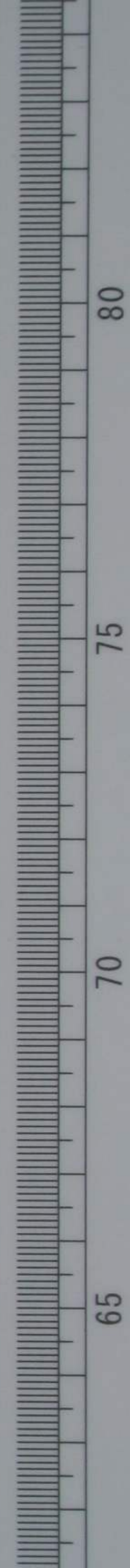
表象抒情詩











65

70

75

80





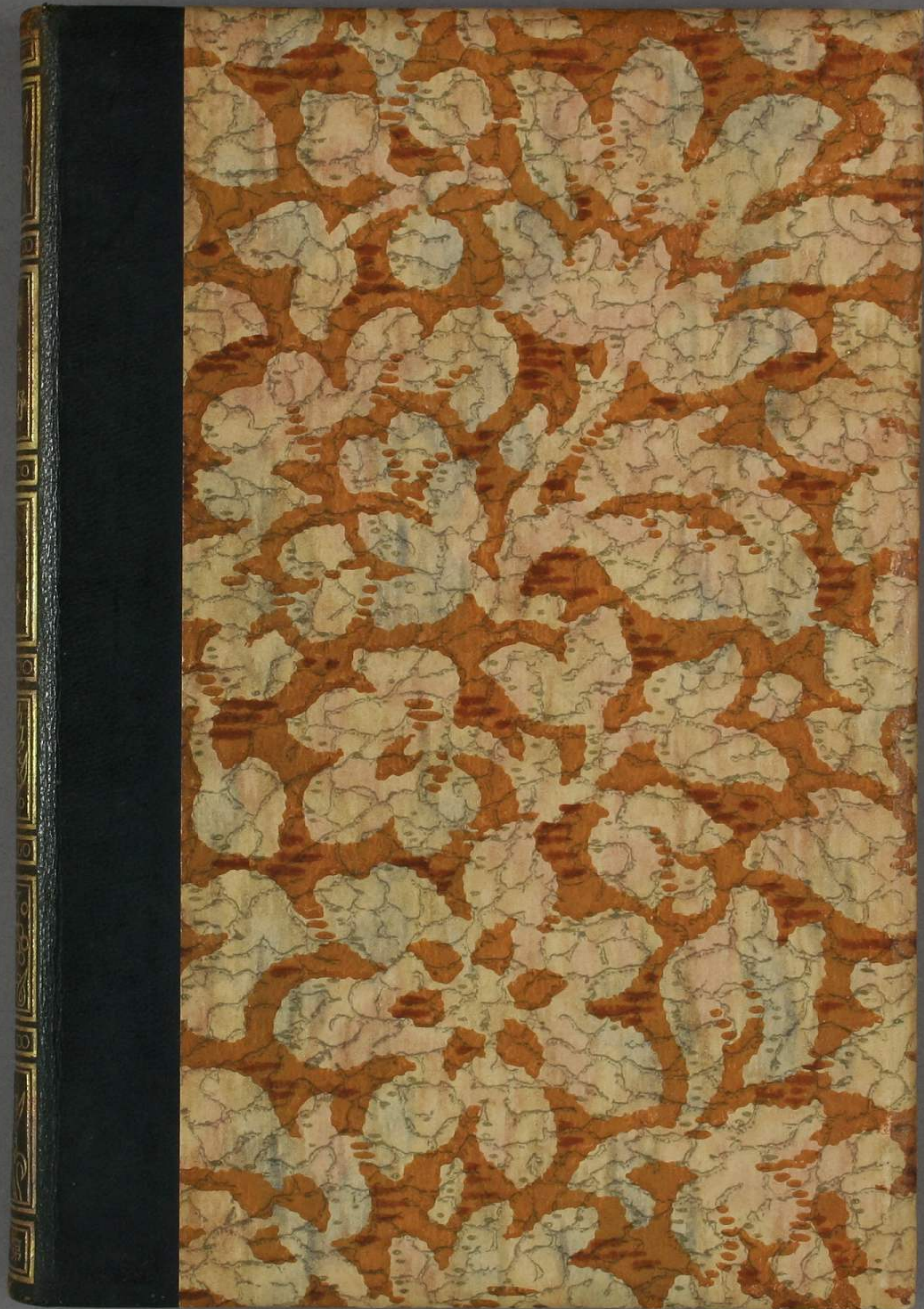
第三象  
表  
詩情抒

口野  
郎次米



房書一第



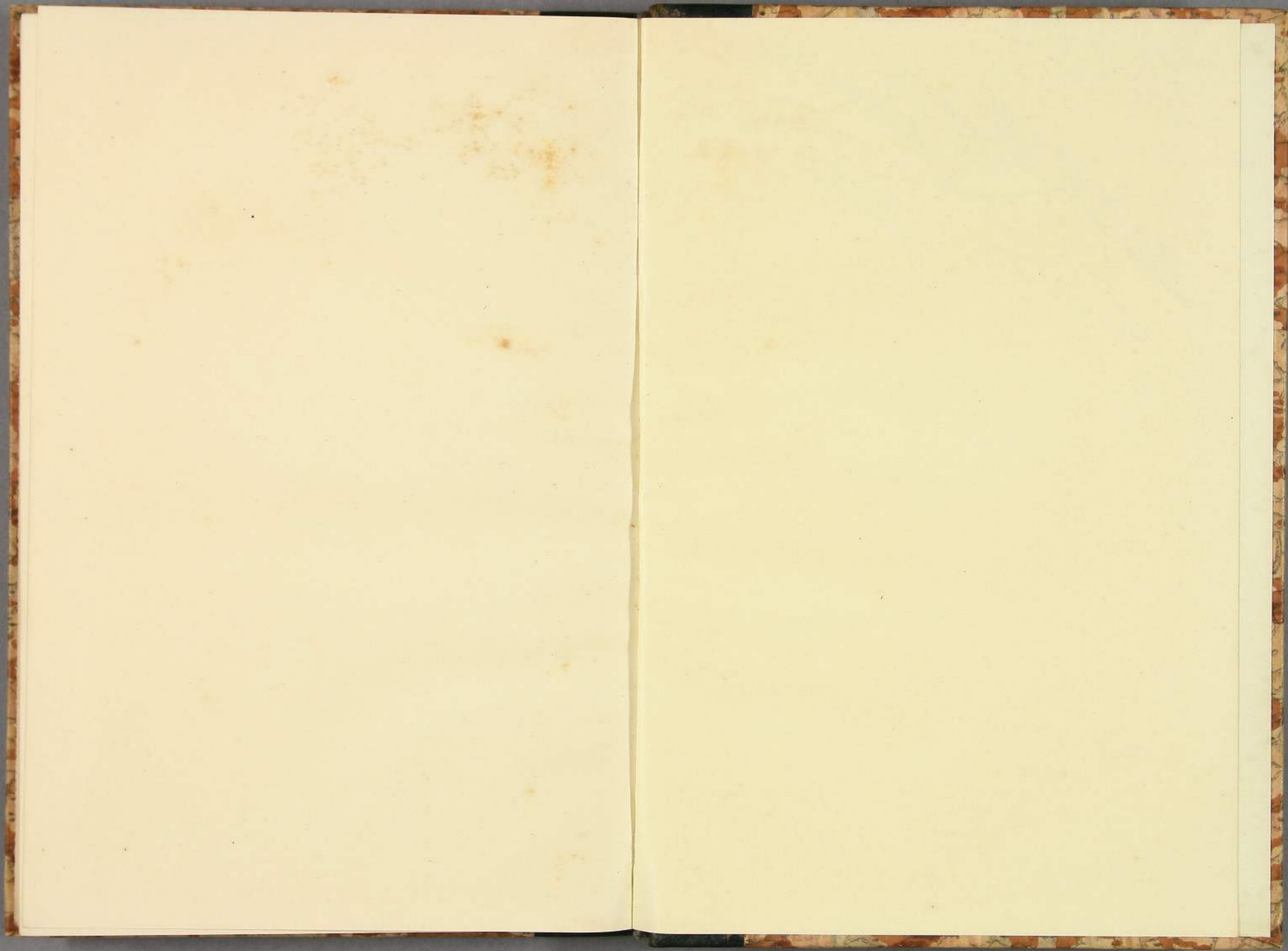




Gerard H. Manxawa  
L 23 de nov. '30  
Lottori 1









詩

集



野口米次郎著

第三

表象抒情詩

東京高輪

第一書房刊行



目次

女神と男神	二
沈黙の血潮	三
貧しい一燈	四
渾沌	六
光琳模様	六
想像	三
尼姫様	六
松並木の堤	六



薔薇	三二
馬	三四
朝	三七
薔薇	四〇
歌の聲	四二
詩が魂を無くして	四五
都會人	四八
一寺院に於て	五〇
リセント街	五二
ある露國の舞踏家へ	五五
元旦の詩	五七
京都	六〇

私の心	三三
平和	三三
叫び聲	三六
長い悲哀	三六
一寺院の園庭にて	三六
小さい鳥	三七
舞踊	三七
落日	三四
雨	三六
歎息	三六
蟲の聲	三八
夕	三九



夢	八三
躑躅	八六
足音	八八
小猫	九〇
武器	九二
聲	九四
提燈	九六
蝶の言葉	九八
催眠歌	一〇三
小曲集	一〇七

第三表象抒情詩



だれかが拾ふであらうと思つて急に拾ひ上げ、  
又『惜しいことだ』と人がいふだらうと思つ  
て、それを捨てて仕舞ふ……私は詩の上になれ  
を體驗した。詩は問題でない、徒に議すべきも  
のでない。詩は禮讚である、禮讚する詩は自  
然に生長してゆく。詩は美的神經一つにかかる。  
思想や感情を夢化するのがその仕事だ。

## 女神と男神

女神は長い河の羊毛を紡ぎ給ふ。

(紡ぐ女の聲は銀だ！)

男神は日中の白さと夜の黒さを永遠へと紡ぎ給ふ。

(おお、紡ぐ男の黄金の沈黙よ！)



## 沈黙の血潮

右には廣々した灰色の沙漠、  
左には錐のやうに尖つた雪の峰、  
風はその間を無遠慮に吹きすさんで、  
木の葉を落した樹木の指先から沈黙の赤い血が滴る……  
君はかういふ場處を想像したことがあるか。

私は今この沙漠と雪の山との中間に居る。  
ここは世界を失つた人間が追放される處かも知れない。  
私は全身の呼吸を凝らして、  
ちつと蹲み、  
沈黙の血汐がぼたりと樹木から落ちて  
詩の寶玉と變じ、  
夕日をうけて燦爛と輝くのを見詰めてゐる。



## 貧しい一燈

私は貧しい一燈を捧げ、

女神の前に膝まづき、禮拜し、歎美する。

聲があつて語る、『お前の女神は目はあつても笑はない、口はあつても語らない、

お前の祈禱は答へられない、

お前の歎美は無益であらう。』

私はその聲に答へる、『私がまづ笑つて女神を笑はせる、

私がまづ語つて女神に語らせる。

私は報酬を思つて祈禱するものでなく、

私の歎美は結果を問ふものでない。

若しも女神が私の燈火に答へないならば、

私はその火で自分を焼き、

死んだあとで女神を悲しませよう。』



## 渾沌

天地創造の始め、

悠々と流れる時を逆に想像して、

(時のそもそもの始めを私は考へる、)

茫漠な闇が一面に溢れる……

ああ、實在のない、エキスペクテイション待ち設けの世界！

耳のあるものは聞け、耳語と戦慄が闇のなかから来る。

目のあるものは見よ、萬物の魂が希望の曠野を駈廻る。

ああ、豫想を現實化する時が近づく、

時は熟した……無が有と變る時が近づく、

底の無い闇が沸き始める。

聞け、神の聲が叫ぶ、『そこに光明あらしめよ！』



## 光琳模様

朝眠から醒めて頭をあげると

四歳になる女の子が家内にちやんちやんを着せて貰つてゐる。

地はメリンス、模様は光琳の波の渦巻に千鳥。

私は二百年前の借金でも拂ふやうな氣分で、

夜具のなかから光琳の藝術に感謝してゐると、

家内や女の子の姿は消え、寝てゐていつも苦にする天井の龜裂も見えずなり、

眼前に擴がる渺茫たる大海原、

音無く大きな紆曲をかく群青色、

小さい波は黄金の線で描いてある。

昔弟橘姫が静めた走水の海の柔順さを見るやうで、

中に恐しい力を包んだ厚い皮の波、

この上ならば安全に歩けると私は思つた。

さうすると私は着物を濡さずに水を渡つたフェルデナンドだ、

又この海を描いた魔法者の光琳はプロスペロだ。

『ああ、プロスペロの光琳!』と私が叫ぼうとすると、

四歳になる女の子が唐紙をすつと開けて、

『お父さん御飯が出来てよ、お起きなさい!』と叫んだ。



私が眼をすゑて着てゐるちやんちやんを見て居ると、  
千鳥が十にも二十にも、  
百にも殖えて、  
鳶のやうに大きくなつて、  
銀色、金色、  
落花のやうに、  
群青色の波疊にばつと散つた。

## 想 像

降る雪を花と見立てる東洋の想像に對し私は感謝する。  
冬の霜や風に春の音信を聞く東洋の想像に對し私は感謝する。  
季節から冬を奪つて、室内に春を創造する東洋的態度は、  
必ずしも冬を恐れるからで無い、  
一日も早く春の法悦に浴したい希望からであると信ずる。  
ああ、東洋的想像よ、  
あなたは決して卑怯者で無い、



あなたは無とを有する勇者です。

あなたのお陰で私達はこの小さい島を大きな世界として數千年間  
生きて來ました。

この貧しい生活を喜ばしい幻像で包んで生きて來ました。

ああ、東洋的想像よ、

あなたは私達の眼界から實在を奪つたのではない、

あなたは私達に フラス、ダインジョン 第四次の世界を與へました。

少くも私があなたを失つたならば、

その時こそは、日本といふ故國に告別して、

紐育か倫敦の郊外に移住するであります。

ああ、東洋的想像よ、

なんだか私はあなたに離れさうに思はれます。

どうか私をしつかり捉へてゐてください……

私の二つの手はここにありますが、

その手をちつと握つてください。

見れば私の部屋の床間で福壽草は笑ひかけてゐる。

(外部の空は灰色で今晚あたり雪になるかも知れないが、)

火鉢の炭はばちばち跳ねて、

粗野な森林の物語をはなしてゐるかと思はれる。

私は私が創造した室内の春を楽しみたいと思ふ。

だが一二箇月もたつと、外部の自然も實在の春に笑ひこけるであらう。



その時には私が創造した室内の春は障子を打ち開けて、  
外部の春と同資格で握手するであらう。

そして私は四條派の繪に見るやうな花の雲を見るであらう、  
又北齋や廣重の繪に聞くやうな無邪氣な人間の笑ひを耳にするであらう。

客觀的に出立した私の春の思想は

段々と主觀的領土に入る。

もう四月になつたと想像する……

その頃には私の心理状態も不思議に進化して、

春の箇々別々の姿を見ずに、

春全體の大きな幻像を眼前に認めて、

それが霧のやうに見えたり隠れたりする間に

私は私自身の小さな存在を失ふであらう。

私は私自身を失ふことで生命の大きな喜悅を得るであらうと喜ぶ。

又その喜悅も間もなく満たされて、

默想の休みを希望するのであらう。

春で自分の力を消費し盡した自然は

是非共一時は休憩せねばならない。

そして再び自然が活氣づいた時には、

皆さん御覽じろ、自然は藤や菖蒲の光琳屏風を澤山ならべて、

あなた達の御入來を待つてありませう。



## 尼 姫 様

『お奇特の人はお蠟燭をお上げ下さい』と私は聲高らかに叫ぶ……

私は九つの子供に立返り、近處のお寺の開帳に頼まれて、

羽織や袴を着け、今本堂の右の隅に陣取つて蠟燭を賣つてゐる。

三里界限から集まつた無数の善男善女の唱へる念佛の聲は

堂内で立昇り舞降る線香の煙のなかで咽びかへる。

金びかの御佛は物を言ひたさうに、信心深い人間の波を御覽になつてゐる。

私は『お蠟燭』と叫び乍ら、右手に開いた障子からお寺の庭を眺める……

そこに太鼓形の池がある、青い綺麗な水に映る蓮の花の間を

大きな緋鯉が縫つて歩いて水をばつと赤く染める。

今お賽銭がばらばらと眼前の佛様を目掛けて雨のやうに降る、

念佛の聲が押寄せる朝の潮のやうにとつと高まる、

ああ、善光寺の尼姫様がいよいよ本堂にお出ましの時刻が來た。

私と太鼓池との真中を虹のやうに懸つた橋の上を、

真青に頭を刺つた澤山の尼さんを引連れて、

色の白い綺麗なお顔の尼姫様が緋の衣をお着になつてお渡りになる。

『極樂へ行つたならば、かういふ女の佛様に頭を撫でられるかも知れない』

と私は心のなかで思ふ。

『お奇特の人はお蠟燭をお上げ下さい』と私は一層聲を張上げて叫ぶ。



## 松並木の堤

私の郷里に松並木の堤がある、

その上を歩くと想像する、

(実際には無いが) 清い河一筋が堤の脇を流れてゐる、

雲の工合で河の面が晴れたり陰つたりしてゐる。

風に撥ぐられて笑つたり叩かれて澁面作つたりしてゐる。

「これは澤山の塔があるキヤメロットの都へ通ずる河かも知れない」と  
想像すると、

斜に流れる夕日の光のやうな中世紀の騎士が眼前に顯れ、

着て居る甲冑を音させながら馬上で、

(澄み切つた空氣の中へ甲冑の音が響き渡る、)

美人を描いた黄金の楯は火のやうに燃えて。

『これは物語に名高いサア・ランスロットかも知れない』と想像すると、

硝子張りのやうな目をして蒼白い顔のお姫様が

(これは南ケンシングトン美術館にある『シャロット姫』だ、)

私の足下の河淵を小舟で通られる。



一天急にかき曇つて風が東からも西からも吹いて来て、  
樹木は恐れ慄いて黄色の木の葉を拂ひ落してゐる。

(私は想像する)いつの間にかやらテニソンが歌つたシャロット姫の場面は消え、  
今度は廣重が繪に描いた徳川末期の田園情調となる。

なま温い南の風がふわりと運んで来る菜種の香に

ひらひら飛んで来る蝶々は三つ四つ二つ、

戀歌の色紙でも飛ぶやうで、

私の想像の耳は堤のずつと向ふから、松並木の陰を通つて、

聲高く聞えて来る『伊勢参り』の木遣音頭にがらりと開いた。

## 薔 薇

お前が朝寢床から起きると、

柔い薄い寢卷の下からこんもり高い乳房が覗く、

(『ロセチは詩で幾箇處も女の乳房をうたつてゐる』と私は自語する、)  
寢亂髪をすかして見える耳は

江の島土産の赤い貝殻を思はせ、



木目の細い頬から首へかけて枕の跡は

硝子を洩れる太陽を受けて虹となる、

〔最後の接吻をするとかういふ跡がつくだらう〕と私は自語する、  
寝巻がするりと大理石の肩をすべる、

お前は後うしろから着物を大きな波うたせる、

その波の下から二本 足が見える、

着物をたくし上げる手の指にダイヤモンドがびびかりとする。

お前は手水を使い、うす化粧をする、

お前は庭の硝子障子を開け放ち、

黒い長い髪を梳き始める……

青ひかりする太陽はお前の髪を青ひかりさせる、

(ああ、時は新緑の五月だ、)

今年始めての蝶々がお前の髪のかぎ廻る……

いつの間にやらお前は大きな薔薇と化ける、

私は朝の静けさをつんざいて地上に落ちるお前の花瓣に耳を敬てる。



## 馬

私が不圖目を覺すと、  
私に時と場處の意識が無い、  
私を取巻く物凄しい暗黒と沈黙とを破つて、  
銅鐵のやうな冷たい音が響いて来る……  
霜夜の地面を蹴る馬の蹄だ、  
私の魂の眼はぱつと開き、  
すぐ前に三疋の駿馬を見る、  
馬の鬣は風に亂れ、

蹄で蹴られる雑草は波のやうに蜷り、  
蹄の音は遠方で鳴く鼻に答へる、  
空を見上げると地上に影を射す力の無い月が映つてゐる、  
私の眼がちつと走り廻る馬を見詰める……  
いつの間にやら人間が馬に跨り、  
吹荒む風の間を泳いでゐる、  
私の聴官が急に鋭くなるやうに感ずると、  
馬上の人間の叫ぶ聲が  
私の耳へりんりんと響いて来る……  
ああ、彼は幻の豫言者だ、  
その聲は叫ぶ、『世界の外に希望は溢れる、



憧憬は岸の無い海に擴がる、  
お前達は幻の波に耳を傾けよ、  
體を屈めてお前達をさし招く星に導かれて一飛躍せよ、  
地上の追放エキザイルから逃れる時が來た、  
肉はお前達永久の住處でない、  
地上はお前達に何の慰藉も與へない、  
お前達は眼前の神を見ねばならない、  
恐れずに神に挑戦せよ、  
岸の無い海を渡り、  
希望と憧憬の珠玉を掴め、  
目覺めよ、早く目覺めよ、目覺めよ、』

## 朝

私は夢を見た……  
私は恐しい物を見てその苛責に苦しめられ、  
私の血走つた眼は星を見詰めてその祝福を望んだが爲め、  
痲痺し終つて、  
今闇黒な地獄から漸く這ひ出した。  
東雲しのりの風に觸れてその味を嘗め、  
生命の急な戰慄おろつを感じて私は震へた。  
奈落の苦悶者の吐く呼吸は



私の顔を無慈悲にも  
黒い汚點しみで汚した、私の顔位  
見るに恐しいものは無かつたであらう。  
私は東雲しのぶの青い香を吸つて  
徐々に甦よみがるに至つた。

私は顔を東方に向け、  
恰も遠くの水溜りを嗅ぐ家畜の如く、  
朝日の登るのを眺めた。  
光榮の光を放つて海上から  
復活を轟かす黄金の歌、

いな光と愛の接吻に私は感謝した。  
白い衣を纏つて太陽をまはつて踊る二人の天女、  
一人の天女は『喜悅』、深紅の冠をつけ、  
その眼からは銀の光明、  
雲の如き毛髪に花をかざしてゐる。  
他の一人は黒衣の『信仰』、  
無言の額イシワイニチに無限の唇。  
私の頬は急に赤く色づき、  
私の眼は古い喜びの現實で輝き出した。  
微笑わらわと愛の朝露は  
私の歌を豊かに満した。



## 薔 薇

薔薇は詩人にいふ、

『あなたは私を歌ってください、それは有難いが、私以上にも又以下にも想像を遊戯していけない。私の存在を亂用して、あなたは自分の

理想や戀愛を紡いではいけない。私はあなたの眞實な知覺センシビリティーに依頼するものだ。私は日光と露から生れて日没時にはもう死なねばならない花に過ぎない。私は永年の間あなたに誤解されて來た、あなたは私の美を不動確實のものとして歌つた……然し私に美があるか否やが先決問題である。若しそれが有るとしたならば、私はそれを消えゆく生命の苦痛で得たものだ。私は消パネセンス失そのものの心理状態のほか何物でもない。』



## 歌の聲

『梅に櫻、花菖蒲、藤が散つたら躑躅の番だ……』  
こんな歌の聲が聞えて来る。』

野原は輝く太陽に胸を擴げ、  
谷川は晝夜の差別なく流れる、  
咲く花は潮のやうに生氣を漲らせ、  
散る花は自分で墓場を掘る。

『梅に櫻、花菖蒲、藤が散つたら躑躅の番だ……』

こんな歌の聲が聞えて来る。』

ああ、時から生れる新しい花よ、

ああ、空間へ消えて行く古い花よ、

三日も経てば……ほら、そこに菖蒲が咲く、

三日過ぎると……ほら、躑躅の世界がやつて来る。

『梅に櫻、花菖蒲、藤が散つたら躑躅の番だ……』

こんな歌の聲が聞えて来る。』

時は無終に流れる……勿論のことだ、

空間の姿は瞬間ごとに變つて行く、

彼は賢者だ、彼は愚人だ、彼は成功だ彼は失敗だ……



ああ、それが何の意味を語る。

〔梅に櫻、花菖蒲、藤が散つたら躑躅の番だ……〕  
こんな歌が聞えて来る。〕

### 詩が魂を無くして

詩が魂を無くして、

死のやうな青い瘦せた體を運び、

寂しい風が吹く夕暮に、

あなたの家の内玄関に立つたなら、

定めし『幽霊が来た』などとあなたの子供は騒ぐでせう、

だが、あなたは詩の冷たい呼吸に顔を背けないで、

彼の石蠟のやうな生氣のない體を書齋に迎へ入れ。



燃える燈火の影に座を興へ、

一杯の番茶でも御馳走してやつてください。

詩は容易に出ない血の涙を體から搾り出して、  
うれし泣きに泣いて、

あなたの好意に報いるであります。

そして詩があなたを辞した後、

彼が落した涙を調べなさい、

涙は寶石とかたまつてゐて、

あなたの書齋を飾るに足りるであります。

朝忍び入る太陽の光線を受けて、

緑色に輝き、

夕日に照らされると、

もとの血の涙となつて、

あなたから受けた持成もちなりを感謝するであります。



## 都會人

あなたは心の微笑者でいらつしやる、

急進論者の大言壯語をお知りなさない、

どこまでも主我論者の禮節をお守りになつて、

落着いた呼吸で文明を抑韻なさいませう。

考へますると、文明位矛盾な謀反的な悲劇的なものはありますまい、

そしてあなたの半面である『伊達者』には痛切な根強い悲觀論が潜んで

居ります。

私は薄暗い陰氣な空氣を通してあなたの潑刺な生氣を拜見しますると、

私はあなたの若々しい武者振を驚かすには居られません、

あなたの伊達者は心の伊達者で御座います、

故に、内面的で心理的で、男性的努力を生命として居りませう。

あなたは心の伊達者の態度で、

野卑に對する悲痛な戦闘史を書いて居られます、

あなた位主義に殉ずる一國者はありますまい、

そこがあなたの眞實に都會人である所以でもあります。



## 一寺院に於て

私は幽霊の如く忍び込む、  
都會の聲からばらばら落ちる『沈黙の木の葉』のなかへ……  
この沈黙の木の葉は灰色、世界よりも年取つて夢のやうに柔かい。

影の聖殿……黒衣の『孤獨』は  
思想から思想へと歩み、生命と詩から忘れられた一微風だ。  
平和な秋の法悦は言葉なき祈禱から得られる。

私は時と場處の觀念を離れた一小蛾……  
沈黙が傷つけられることを恐れて飛び得ない、  
ただ停滞する、恰も指をあげて嫌ひな路を差し示す一偶像の如くに。



## リゼント街

人生は陽氣だ。

如何に陽氣でも頓着するに及ばない、ただ陽氣の代價を拂ふのみだ。

ああ心のゴンドラ船、洋々たる人生の水路に揺れよ揺れよ、

ああ、陽氣な残忍な不人情なリゼント街。

心の小さいゴンドラ船よ、なぜお前は

美の生命に酔つた胡蝶のやうにかくも躊躇するか。

お前は希望の空しいことのみを見るからであるか。

ああ、笑ひ嘲り人を誘惑するリゼント街。

他の澤山のゴンドラ船に路を開いて、

短い人生の歡樂を歌はしめねばならない、

然しこの洋々たる水路の苛責に注意せよ……

ああ、妖魔シレンのやうに待ち伏せするリゼント街。



ある露國の舞踏家へ

木の葉が風に笑ふやうに、

花の魂が太陽の光に飛躍するやうに、

宇宙の法則の一部分を握つて、

合理的に全體を實證するあなたは偉い人格だ、

あなたの舞踏は人生の讚美歌だ、

生命の喜と悲との不思議な混成物だ、

生命の強と弱との稀れな融和だ、

あなたの腕に、あなたの脛や踵に、……

いいえ、あなたの舞踏は體の上に於てのみでない、

あなたは心の舞踏家だ、

ああ、あなたは自由の人、

破壊して直ぐ完成する伎巧家、

想像で動く抒情詩人、

しかも理智の背景を持つ宗教家、

あなたが人生の謎の前に投げた暗示でなくて何であらう、

あなたの眼のなかから、指の先から、

生命は流れ出る、あなたは生の創造者だ、美の把持者だ。

あなたの舞踏を見てゐると、



あなたを我々の代表者と見出して、  
我々は歡喜する、あなたの前に跪づく、  
あなたは女王だ、  
我々の崇拜を受けて下さい。

## 元旦の詩

南極から北極に渡る大洋の胸に流れる智の沈黙よ、  
太陽が接吻する東から西に立並ぶ山に愛の沈黙がある、  
おお、今日一月元旦の沈黙よ……  
友情の沈黙、平和の沈黙、おお、世界の沈黙よ、  
言葉を語つてならない、憤怒の言葉嫌惡の言葉を語つてならない。  
不平と争鬭の言葉、狂へる言葉を葬つて仕舞へ、  
天國の沈黙、人情と愛の沈黙を歓迎せよ、



今日一月元旦を祝賀せよ。

聲なくて語る、「時の年取つた心から新しい王様が生れる、人々は悲哀の壮大な苦痛から生れる王様を見ねばならない、王様は平和の白い歌と、沈黙の限りない心を持つて来る。虹のやうに新鮮で、南方の風のやうに不意に人を驚かす王様は、立ちあがつて宣言する、「私は今日一日にあらゆる問題を解決しよう、愛と祈禱の力で最後の解決を謀らう。」」

四つの大洋と南や北の山々の沈黙は

今破れて、星のやうに巍然たる王様を祝賀する。

「愛と豊饒を地上にあらしめよ、人情を破産させてはならない、光榮の長い生命で王様に春の冠を飾らせよう、

一月元旦を迎へる神様のやうな聲で、我々は王様を祝賀しよう。

祝賀せよ祝賀せよ、見よ一月元旦の朝日は昇り始める。」



## 京都

自然が反省的に目覺めて、

人間と融和した抒情の記録が即ちお前だ。

お前は舊日本文明の總勘定だ、

東洋趣味の最後の表象だ。

お前は抽象的な突進に生氣を盛るが、

時には推論と理知の破れを見せる、

それはお前がロマンチズムを捨てることが出来ないからであらう、

私はお前に現實を見る眼が無いとは云はない、

だが、お前は文明を傳統的に脚註づけて、  
自己否定の悲劇を演ずる。

お前の寺院を見ても、お前の庭を見ても、

お前のお茶屋を見ても、お前の舞子を見ても、

悉くオリンパス山上の一都會であるとは思はれるが、

私は満足してその住者たらない。

お前は時を超絶すると思つて居らうが、

お前の鬢髪の白い事實をどうすることも出来ない。

お前がどのやうに若いと主張しても、

お前の年齢を如何ともすることが出来ない。



## 私の心

あれは私の心の火の反照でせうか、  
あれは西方の空を焼く日没でせうか、  
あれは私の心の不安の反響でせうか、  
あれは沙上に破れる海の叫びでせうか、  
あれは私の心の悲みの聲でせうか、  
あれは闇の路を求める風の歎きでせうか、  
あれは私の心の涙でせうか、  
あれは天から悲劇を運ぶ雨でせうか。

## 平和

夜の懶い旋轉……影の如き平和は世界を包み、戀愛と夢は無限のうちに眠る。  
豊かな狂想から新しい世界は生れる……陸と海と人間と月はその胸に朦朧を  
巻く。  
ああ、人生は母の孤獨と眠る、その羽翼に抱かれて私は沈黙の説教を聞く。



## 叫び聲

朝日は既に叫び聲を聞く……

西方からの叫び聲を。

鳥よ、お前は遙に巢の呼ぶ聲を聞き

そして家路を急ぐのであるか。

柔らかな靈よ、花の咲くしばしの間、

ここに止どまり歌をうたへ……

お前は幽界の道から響く聲を聞くのであるか。

春も花も瞬間に死ぬであらう……

靈よ、私の愛人よ、お前はそれ等と共に過ぎゆかんとするであらうか、

だが、しばしの間ここに止どまれ。



長い悲哀

小河は樹木の陰へと急ぐ、

その銀歩は恰も月へと急ぐ愛人の歩みの如しだ。

ああ、長い小河、

長い私の悲哀。

風は揺れる柳の下に消える、

その黄色い笑ひは恰も白百合の路をゆく愛人の笑ひの如しだ。

ああ、長い柳の動搖、

私の長い悲哀。

燕は太陽へと翱翔する、  
その姿は恰も私の心に打勝たんとする愛人の姿の如しだ。  
ああ、長い燕の翱翔、  
長い私の悲哀。

私の涙は足下の薔薇に落ちる、  
薔薇の呼吸は半ばの愛と半ばの嘲弄、恰も私の愛人の呼吸の如しだ。  
おお、薔薇の長い沈黙、  
私の長い悲哀。



## 一寺院の園庭にて

私は恰も海に訶さいなまれた小舟の如く、  
ここに避難し、

私は體と心の帆とを横たへる。

私を憐れみ私を迎へるこの園庭に  
何たる佛陀の香氣があるであらう。  
祈禱は紫色豊かな空氣に響き、  
私の心もその音律に結びつく……  
ああ、人生の海に傷ついた私の胸を癒して貰ひたい、  
ここに祝福された涅槃の手が温かい。



小さい鳥

小さい鳥、

母の涙から生れた私の鳥、

羽を延ばし、

飛び、

羽の中から母の消息を落す、

『家へ歸れ、懐しいものよ。』

小さい河、

母の胸から流れ出る、

急にその歌を止め、

太陽を見上げ、

小波さざなみのなかに母の消息を煌かす、

『懐しいものよ、家へ歸れ。』

私の薔薇、

私の小さい薔薇は母の呼吸で育つ、

今は悲しい、



顔を下へ向ける、  
私は母の消息をその花瓣の間に讀む、  
『家へ歸れ、懐しいものよ。』

## 舞踊

月の忙しい足は  
官能が目覺める處へ急ぐ……  
私は心の静寂を完全ならしめ、  
戀愛の幽靈を苦痛の上で舞踊させよう。



## 落日

風に吹拂はれた太陽は林中に入る……  
太陽でなく私の心の反照かも知れない。  
太陽と枯葉の火焰ほのかは  
最後の歌と美に燃え、  
人生の最後の感激に燃える。

太陽が無言に投げる光線は一幅の繪畫を照らす……  
この繪は昔むかし私の愛人が描いたものだ。  
落日の光線をたどつて私は彼女が秘め置いた涙の神祕を求め。  
私は彼女が筆を握つた時、如何にその指が輝いたかを記憶してゐる。  
今や枯葉と落日の美は暗明のうちに、  
私の心のなかの繪畫は歎息のうちに消えてゆく。



## 雨

雨は夢の如くに生れ、  
藝術として死ぬ、  
一瞬間に、  
おお、希望と死の幻！  
私の靈は

雨の銀線に踊る、  
いな自分の悲しい歌に踊る。  
木や花や山、すべての世界は  
雨の涙で  
その罪の生命いのちを洗ひ、  
私は一層新しい深い人生に  
入りこむことが出来るだらうか。



## 歎息

落日の後を追ふ風の音に、  
古い古い追憶を悲しむ柳の歎息ありといふ……  
君はそれを聞かざるや。  
夜を襲ふ海の音に、  
古い古い曙光の物語をしのぶ竹の歎息ありといふ……

君はそれを聞かざるや。  
幽界へ流れる河の音に、  
古い古い黄金時代の夢をしたふ松の歎息ありといふ……  
君はそれを聞かざるや。  
遠く飛びさりし鳥の音に、  
古い古い天鵝絨びらうじやうの平和を招く蘆の歎息ありといふ……  
君はそれを聞かざるや。



## 蟲の聲

吐息する眞夜中に、  
月がこぼす黄金の酒に燃え、  
蟲は慄き狂ふ。  
喜悅の舞踏は千餘あれど

悲哀の歌はたつた一つだ。  
ああ、情熱の歌地上に廻り、  
歌ひのこした音律を再び續ける。  
傷つけられたるものの歌は悲しい、  
蟲よお前は歌ひ終るまで死なぬであらう、  
お前の歌は  
病と夢に苦しむ私の叫びに外ならない。



夕

夕の風は私の追憶を甦らせる、  
私は避難を夕に求め、私の眼は星を見るべく急ぐ、  
すべての木や花はその額を夕の胸に垂れかける。  
見よ、アダムやイブは家路へと急ぐ、  
私は獨り己が月下の影を地上に待つ……  
月よ、私を慕ふ従僕一人なることを示し給へ。

夢

(夢であらしめよ。)  
花は  
黄金色に深い  
潮のやうに  
高笑ひする。  
私の心は  
花を迎へるため  
飛びあがる。



(夢であらしめよ。)  
かかる時、

私は聲高く叫び、

お前を呼ぶ、麗しい靈よ、

そして私は星のやうに、

心喜びに満ち、

静寂にかへる。

(夢であらしめよ。)

然し遂には空想に追はれ、

恰も自由に軽い

雲の如くに、

何處へとも知らず、

ただ彷徨ふ。

(ああ、夢であらしめよ。)



躑躅

躑躅はかがやく赤に白に。

消え、燃えあがりまた消える、

空に太陽と雲が分れ、合ひまた分れる。

躑躅は雲とむらがる、白に赤に、

なかに消えない一つの光あり、

ああ、田園詩の美を彼女の顔に見よ。

おお何たる喜悦よ、

雲とむらがる躑躅の赤と白との間、

彼女は私の愛の歌を待つてゐる。



## 足音

私は足音を聞く、  
その聲は灰色に柔かい……  
私の忘れた幽霊であらうか、  
一滴、二滴、三滴、  
雨はしたたる。  
空に一切れの雲、

その色は大地の如くに古い……  
過ぎゆく幽霊であらうか。  
足下に一片の木の葉が落ちた。  
雲は消えた。  
私は休憩を求めながら  
夜の風を追ふ。  
私は黒い愛の衣をつけ、  
祝福を感じて動悸うつ。



小  
猫

夜の聲の静けさ、

(それは銀色の星の戦慄をちのぞか)。

愛戀の聲の深さ、

(それは薔薇の花弁の落ちる音なか)。

お鈴ちゃん、お前の喉に私はさく、  
音楽家が時代の埃のなかに失つた絲の音を。

悲しい風に靡きながら

踊る仙女の聲よ、

喜悅を苦痛と化する聲よ。



## 武器

武器は微笑と小さい扇子。

〔左様なら、左様なら……〕

その首は鶴のやうに曲り、

地の中に戀の寶玉を求めぬ。

〔左様なら、左様なら……〕

ああ、彼女の衣は、輕くうつ雲のやうに、

蝶の抒情詩を追ふであらう。

〔左様なら、左様なら……〕

素足が打ちだす彼女の歌を聞き給へ。

〔左様なら、左様なら……〕

彼女の駒下駄は戀の樂器だ、

白魚のやうな指が、樂器の見えない絲をもて遊ぶ。

〔左様なら、左様なら……〕



## 聲

### 第一の聲

風の木の葉へ風は隠れる。  
私は鐘の音と共に夕の道を求める。

### 第二の聲

海に夏の霧の喜びがある、

潮の満干は歌ひ捧げる私の祈禱だ。

### 第三の聲

私は秋の靈だ、旅の衣を紡ぐ、  
木の葉が空へ飛ぶ處に私の道が横たはる。

### 第四の聲

私は冬の雪に乗つて降り、  
日光の愛で救はれることを冀ふ。



## 提燈

最も古く最も若い愛、  
消えても躊躇ふ心の香氣、  
彼女の額は象牙だ、  
私はそれを接吻して死ぬであらう。

ああ、ここに古い天から生れた若い月が一つ、  
老いた褐色の地から生れた薔薇が一つ、  
彼女は朝日へ上る霧の如く、  
その聲は暗明に消える夕の鐘、  
悲哀と愛の創造だ……  
彼女は歌にゆれる春の提燈だ。



## 蝶の言葉

蝶は人間にこんな言葉を語るかも知れない、

『かういつちや失禮かも知れないが、人間の批評位

不徹底な片手落なものはないと思ひます、

私に人間の賢明さを疑ふといふ言葉を用ひさせて下さい。

私に對しても、あなたは私が花の間に情熱を散らしてあるく活動だけを

見て居るぢやありませんか、

あなたは私の生の繁盛エトサプランヌは美だと褒めて下さる、

あなたは私の飛揚が無意識に示す模様美の調和を褒めて下さる、

あなたは私の活動が描く半面像の輪廓線は美はしいと褒めて下さる、

あなたは私の飛揚は韻律的生命の抒情詩だと褒めて下さる、

あなたは私の活動を舞踏の緊張だと褒めて下さる、

私はそれ等の批評に對して有難く思つて居りますが、

私が敢てあなたにお尋ねしたいことは……あなたは私の靜止の姿を御覽に

なつたことがありますか、

私が花の上に、草の上に、石の上に、乃至は手洗鉢の柄杓の柄の上に、

様粉の羽をばたつと締めて、外から見ると死んででも居るやうに靜まつた

場合を注意したことがありますか。



神は踊るといつて、お黙りなさるといはなかつたニイチエを私は遺憾に思つて居ります、……

神様はお踊りなさる、神様の舞踏は見事なものだ、

萬物はそれから劇的な祝福をどんなに受けるか知れませんが、

それ以上に神様の沈黙が尊くなくてどうしませう。

太陽を廻つて踊る地球の半面は大きな静止の影であります、

だれが夜輝く星の沈黙の歌を聞いて日中の痛みを繕はないでせうか、

獨樂が一番よく踊つて居る時は一番静止して居る時でないでせうか。

私の静止も私の飛揚の場合以上に價值のある活動で御座ります、

私の舞踏が頂點クライマックスに達して静止の法悦境に入るので御座ります。

この點を見て下さらない人間に對して私の不平は無理ではありませんまい。

ああ、だれが、夕日が陰つて薄暗い風が吹く木の下を、

寺から打ちだす鐘の聲に送られて獨り家路を急ぐ寂しい私を見たでせう、

ああ、だれが、秋も末になつて薄ら寒い部屋の欄間に止る私のしよんぼり

した姿を注意したでせう、

ああ、だれが謠曲「卒塔婆小町」の「これなる朽木に腰を懸けて休まばや

と思ひ候」とある百年の姥となつた私を眺めたでせう。

あなたが、私が前後左右に動いて押韻する歡樂の抒情詩だけを讀んで、

私が寂寞の反省で魂を整理しようとする静止の場合を了解して下さらない

とすると、



賢明な人間としては不都合ひだと私は申上げねばなりません。  
もとより私は自分の悲劇を不自然に誇張して、  
あなたの同情に縋らうとするやうな弱いものではありません。  
寧ろ私は人間の不徹底な淺薄な洞察に對して挑戦するものであります、  
人間の一人としてあなたは私の言葉に何と答へるでせう。』

## 催眠歌

—

可愛いお前、ねんねして頂戴よ、  
夜の胸から螢を集めて、  
お前の夢を照らしませうね。  
お前のお父さんは、（御寝みなさい。）  
遠くの星へ蜂蜜かひに行きました。  
星の世界は千里も遠方なのよ、  
でも、日の出には歸つて來ます、



露のお馬に乗りまして、

お前には太陽のやうな大きな太鼓をお土産に。

二

泣かないでね、泣かないでね！

母ちゃんはお月様から、お月様から直ぐ歸つて來ませう、

笑ひと春の家から歸つて來ませう、

お前の顔につける白いお白粉一包持つて、

お前の髪を飾る眞珠の一枝持つて。

め、めをお拭き、め、めをお拭き！

母ちゃん海の下から、直ぐ歸つて來ませう。

蜂蜜と幸福の家から、

露で香のよいお茶一袋持つて、

(お前も愛の次にはお茶の味を習ひませう、)

お茶は母ちゃん紫の風が吹く櫻の下で、

歌をうたふ小河の脇で煮いにしてませう、

そして母ちゃん緑の空の下で『あんよが上手』をお前に教へませう。

め、めをお拭き、め、めをお拭き！

三

これ御覽、お前の頭の上で、

花が頷いてゐますのよ、



花は悲み七つとね、それから、

お前の好きな笑ひ三つで出来てゐます。

悲み七つは母ちゃんが貰ひませうね、

(母ちゃんは泣くことに慣れてゐますわ、)

三つの笑ひでお前を綺麗に楽しくさせませう、

お前は愛の潮に流れる小舟、さあ、私が揺すつてあげませう。

ねんねして頂戴よ、夕方鐘が鳴つて、

夢一杯乗せてお星様が出て来るまで、……

お前は夢を一つ二つ貰つて、

笑ひと歌との真中で、めめを覺して頂戴ね。

### 小曲集

1

落ちる木の葉、いな魂たましひよ、

私は君と共に

運命の流を降るであらう。



2

神に謝します、眠る花のしたが  
私の今夜眠る處だ……  
蝶よ來給へ。

3

生とは何か。一つの聲、  
一つの思想、暗さの上の光明……  
見よ、空に烏一羽。



海は眠る。星……  
星は何處にあるか。ああ寂しい……  
私はちつと自分の心を見詰める。

朝の月の幽かな影……  
いな、地上に落ちる雪。  
咲いた花の霧……  
いな、天國へ微笑む詩歌



6

はるかな空、  
遠方の白い波。

生命はますます廣がる。

7

風に吹かれる木の葉、  
飛びさる鳥。

私は秋の「高棲」たかまきを彷徨ふ。



君は男の星が  
女星と語る戀愛を  
耳にしたことがあるか。

神様よ、あなたは長く  
愛の糸を紡ぎ給ふ……  
兩の愛の糸を。



影……影……

空の影……影……

私の想像の影。

木の葉は落つ……

いな、私の靈は

生命の寂寞に乗つてゆく。



12

微風の路を

戀愛が歌つてゆく……

戀愛は幸福だが寂しい。

私は思想の落葉を集める。

118

13

眞理は永劫の月の如く

いつも完全、凡て金色に言葉なし、

冀くばこの光明を悲哀の上に垂れ、

私に休憩と歌を得せしめよ。

119



14

ことに一つの魂が

追憶の霧を一杯積んだ

小舟に乗つて、

生命いのちの河を滑つてゆく。

15

蝶に言葉の觀念がないではないが、

詩の傷つけられるのを恐れて

敢て語らない、歌はない、



16

風は倫理から解放せられ、  
詩から詩へと歩む。

ああ、平和は黙禱から得られる。

122

17

詩の木の葉は落ちる、  
夢よりも遙に年老いてゐる……  
私の魂は生命をすべり行く。

123



私は叫ぶ、『自らを呪つて  
泣く私自身の幽霊よ。』  
ポツ、ポツ、ポツ……雨は落ちる。

かくて星は年老い、  
生命は過ぎゆく。  
私の単調の歌は私自身を嫌はせる……  
悲哀の歌、  
さては運命の歌。



『薔薇は助けて呉れと泣いてゐる。』

『どうして助けられるものか、

私自身がその泣いてゐる薔薇だもの。』

何處へ行かうとするか。

私の希望は戀愛を求めるにある……

夜の苦痛に踊るハムレットだ。



22

私の古い歌が  
生命の光のなかで往來する。  
一つの蛇が  
急に一直線を私の胸に曳く。

128

23

赤い情熱の海、  
青い人情の山。  
夢は虹を歌はせ、  
石を空へ飛ばさせる。

129



空へ飛んで地上の花を忘れ、  
『雲の住者』たることの喜び。

星の間に沈黙が広がる。

何の聲か……

最後の審判の日の聲だらうか……

波の巡禮者は岸へおしよせる。



26

光と影は

夜の處へ旅しゆく……

私と君は戀愛の家へ。

132

27

聲よ、再び語るな……

沈黙は罪を洗ひ落すであらう。

光りよ、再び来るな。

133



缺點だらけだと君はいふ……  
後悔は美しい。  
涙と歌で生命は流れる。

木の人間となつて  
風がかへして呉れる歌を聞きたい。  
非人間となることの喜び。



歌の断片、その他は何か……  
私は流れに乗って走る人間、  
雲の間で寂しく。

ライヴ  
生への進軍だ……  
歌を失って新しい歌を得よ。  
雲は飛び、花は笑ふ。



雨に海の歌……

空と人間と地上の聲。

私の心の歌を聞き給へ。

詩は海の廣がりを。

遙かなる空を横切る……

私は苦痛の白い波を漕いでゆく。



雲に聳える大伽藍……

そのしたを時代の悲みが行く。

私の聞く聲は果して何であらうか。

私は聞く、大地の

急激な苦痛を落ちる木の葉に。

『生命の秋だな』と私は呼ぶ。



36

生命の船よ、錨を上げよ。  
戀愛の赤い海、  
白い空想の鳥、  
見よ、緑の大きな空。

142

37

かりに星が毀れたならば、  
戀愛のやうな音でもして  
落ちるであらうか。

143



だれだ、戸を敲くのは、  
明日にして呉れ給へ、  
左様なら、ねむい。

私は大きな波の後ろへ隠れる……  
實に愉快だ。  
鷗が私をさがし廻る。



左様なら、私は海へ出掛ける  
隠れた人種が星に歌ひ、  
渴した雲が古酒を飲む處へ。

朝日の光が  
私の胸を覗いていふ、  
『荒涼たるかなだね。』



人生の塵から立ち上り  
苦痛から自らを救ひたい。  
謝肉祭へでも出掛けよう。

皮肉な笑ひで  
詩は私の心を眺める。  
詩はいふ、『小さい陰謀たくらみをしてゐるやうだね。』



風は憂鬱の頭を振り、  
物凄い太陽は悲哀の路を走る。  
私の詩はゆれる、  
恰も柳の葉の如くに。

態度の創造、  
人生の酔ひ、青春と謀叛の詩人。  
ああ、法外無比で傲慢な春。



第三表象抒情詩 畢

46

世界より遙に古い『無』の詩境……  
地上生活の心配よ、  
去つて仕舞へ。



第三表象抒情詩



昭和二年三月十二日印刷  
昭和二年三月十五日發行  
第一刷千五百部

定價一圓八十錢

著者 野口米次郎

刊行者 長谷川巳之吉

東京市芝區下高輪町二二  
刊行所 第一書房

電話高輪一二九四  
振替東京六四二二三

印刷者 望月清矣



第一書房刊行書目

上田敏遺著	上田敏詩集	四六判七百六十頁 背皮金泥美本	定價 三圓八十錢
野口米次郎著	第一表象抒情詩	四六判四百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第二表象抒情詩	四六判四百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第三表象抒情詩	四六判四百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第四表象抒情詩	四六判四百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
堀口大學著	詩集砂の枕	四六判二百八十頁 表紙木判刷美本	定價 二圓
堀口大學著	譯詩集月下の一群	菊判七百六十頁 背皮金泥美本	特製 品切 普及版近く出來
堀口大學譯	譯詩集空しき花束	四六判五百五十頁 背皮特製美本	紙型燒失絶版
堀口大學譯	ヴェルレエヌ詩抄	四六判二百九十頁 挿繪十二枚美本	定價 二圓五十錢
アホリネエ著 堀口大學譯	動物詩集	四六判ジュエフイ書 繪入金泥銀泥美本	定價 二圓
佐藤春夫著	佐藤春夫詩集	菊判本文二色刷 表紙木判刷美本	定價 二圓八十錢
日夏耿之介著	日夏耿之介詩集	全三冊豫約非賣品	讓價 五十圓
三富朽葉遺著	三富朽葉詩集	四六判八百四十頁 背皮金泥美本	定價 四圓五十錢

第一書房刊行書目

三木露風著	三木露風詩集	四六判七百九十頁 背皮特製美本	定價 三圓八十錢
西條八十著	西條八十詩集	菊判初版別製	近刊
萩原朔太郎著	萩原朔太郎詩集	菊判初版別製	近刊
室生犀星著	室生犀星詩集		近刊
茅野蕭々譯	リルケ詩集	菊判初版別製	定價 三圓八十錢



